

令和5年度

北海道教育大学
附属函館幼稚園だより

NO. 10【号】



「あのね・・・」

附属函館幼稚園長 五十嵐 靖夫

「せんせい、あのね・・・えーっと・・・」と子どもが一生懸命お話する姿は微笑ましいですね。皆さんご存じのように「ことば」は人がコミュニケーションをとるために重要です。でも「ことば」の働きはコミュニケーションだけではありません。

「ことば」の重要な働きに概念の形成があります。概念とは、2つ以上の物の特徴、属性を比較し、ある基準にしたがって、共通の特徴を取り出すことです。りんご、いちご、ぶどう、みかんをまとめると、果物という概念になります。果物、動物、自動車といった身近にある物の概念から、思いやり、優しさなど抽象的な概念を段階的に形成します。概念を形成するプロセスは思考の働きによるものです。私たちは「ことば」で考えているのです。

さらに「ことば」は、行動とも関連があります。心理学者のルリアが、おもしろい実験をしています。赤いランプと青いランプの前に子どもを座らせ、赤いランプがいたらボタンを「押す」、青いランプがいたら「押さない」と声をかけると3歳児も4歳児もできます。

そこで次は「赤いランプは押す、青いランプは押さない」と自分で言いながらボタンを押すという課題を指示しました。すると3歳児は、ことばを発することはできますが、手が動かなかったり、ボタンの押し間違いが多く見られましたが、4歳児はこの課題が正しくできました。つまり4歳になると自分自身の「ことば」で自分の行動をコントロールできるようになるのです。もちろん個々の子どもの成長には差があります。

5歳になると「押す、押さない」を自分で言わなくても課題を正しくできるようになります。内言語による行動のコントロールが可能になる段階で、この時期は発声がむしろ邪魔になります。大人から注意を受けた後に「いけません」と言いながら、また同じことをしてしまうのは、「ことば」の意味がわかるという段階と「ことば」が行動をコントロールする段階が同じではないからなのです。



一生懸命お話することが、コミュニケーションをとり、概念を形成し、行動を調整しようとしている姿だと思うと、より一層愛おしくなりますね。